

## 国際化と伝統

有賀 規\*

### Internationalization and Tradition

Tadashi ARUGA\*

最近になって外国人の数が多くなったことが目につく。昔は外国人というと欧米人を想像していたものだが、欧米のみならず中南米、中東、近隣のアジア諸国等多くの国から人が集まっており、分野や職種も多岐に及んでいる。国内での外国人の数が増加していることは、我が国に於いて国際化が進んでいることを示す一つの側面である。国際化の現象は他の多くの面でも見られる。外国語の重要性の認識が高まり、学校での教育でも英語、特に英会話に力が入れられており、外国人講師の数も増えているようである。数多くの外国語の中で、英語だけを重要視して扱うことに対しては異論もあるところであるが、英語が一つの国際語的になっている今日の状況を考えると、妥当でもあろう。国際社会でのビジネスには英語は不可欠とのことで、英語学習を義務づけ、TOEICの試験の受験を勧誘している企業も増えていると聞く。一般社会のみならず国においても、21世紀には英語を第2公用語にしようとする政策案も飛び出してくる状況である。以前は、日本が発展途上国であったこともあり、研究者や学生が留学等の名称のもとに欧米を中心とする先進国へ出向くというのが主流で、いわゆる一方通行であった。しかし、最近では逆に、留学の学生のみならず優秀な研究者を海外から招へいして研究に従事してもらうポストドク等の制度が種々設立され、国外からの研究者の数が非常に多くなっている。加えて、海外から研究者を招へいして専門分野での論文発表、情報交換等を行う我が国主催の国際会議の数も急増している。留学にせよ国際会議にせよ、殆ど一方通行であった昔を思い出すと、双方向特に逆方向の著しい増加の今日の状況は隔世の感がある。レーザー学会を含む学会においても国際化現象が見られる。例えば、最近多くの学会で学会誌として英文論文誌を出版するようになってきている。また、文部省・学術振興会も国際化を推進する目的として、学会誌上の英文論文数の割合が規定レベル以上ないと、予算の援助を行わないとの方針を打ち出している。このような情勢から、レーザー学会でも英文論文数の増、さらにはもっと積極的な英文誌の出版も検討されている。このように、我が国において急速に国際化が進んでいることは明らかであり、多くの分野で国際化の努力がなされてきている。私自身20年余前に米国の研究機関に2年間留学し、この時受けた強い刺激も手伝って、現在進めているプロジェクトでも、海外からのポストドク研究者の招へいや国際会議開催等、国際化に向けた努力を行ってきた。

しかし最近になって、国際化が進むこのような状況が果たして良いのかと疑問を持つようになった。それは国際化が進む一方で、伝統が失われていくからである。例えば、学会誌が英文化されれば、その分、和文誌及び和文の論文数の比率が減ってしまう。レーザー学会での英文論文数の増や英文誌化の検討の中で、和文誌は和文誌として残すべきとの強い意見がある。賛成である。確かに和文誌系の学会誌はインパクトファクター(IF)が0と見なされ、国際的には無視されている。かといって、伝統ある日本語の論文が徐々に減ってしまうのは由々しき事態である。企業のトップが外国人に代わって、社内の幹部級の会議が英語になってしまい、日本語での発言ができなくなってしまったという訴えも聞く。最近、若者の間でヒットしている音楽では英語をミックスしている曲が多いが、崩されてしまった日本語も英語も良く分からない。欧州の歌曲もアメリカのカントリーウエスタンも、英国のビートルズの曲でも、メロディーもさることながら詩も伝統的な美しさをもっている。我が国にも万葉集や川端文学等に代表されるような、伝統的な美しい日本語がある。国際化のため伝統が失われていくのは悲しいことである。国際化は近代化とも共通しているが、国際化の進む率を $\Delta I$ 、伝統が壊されていく率を $\Delta T$ とすると、 $\Delta I \cdot \Delta T \geq \text{定数}$ 、というような不確性原理が成立しているように思う。国際化を進める中で、伝統を守る、伝統が失われない歯止めをかける努力が必要である。昨年亡くなられた私の郷里信州松本の池田三四郎さんは民芸家具で全国的にも有名である。伝統的な木製の家具に欧米の手法も研究して取り入れ、伝統文化として発展させ海外でも高い評価を得ている。池田先生が晩年に建てられた石碑に「古きを守るも開発なり」という言葉が刻まれている。21世紀に向かって、我々に大切な助言を与えてくれているように思えてならない。

\* 郵政省通信総合研究所(〒184-8795 東京都小金井市貫井北町4-2-1)

\* Communications Research Laboratory, 4-2-1 Nukui-Kitamachi, Koganei, Tokyo 184-8795